

土岐善磨と中国 (一)

小田切文洋

Toki Zenmaro and China (1)

Fumihiro OTAGIRI

内容提要：

短歌作家土岐善磨(1885年～1980年)、国語政策和图书馆行政面做出过重大贡献。土岐善磨一生申访问过三次中国。最初的访问是以中国文字改革视察学术代表团团长的身份于1960年3月28日进行了35天的访问。由于这次访问,土岐善磨一行耳闻目睹了中国文字改革的现状,使访问取得了成果,同时满足了土岐善磨自己多年来研究杜甫而产生的亲近感及对中国古典文学的旧情。因此我想对其有关初次访问中国的资料而进行研究与探讨。

土岐善磨は、95歳(1980年没)の長寿を保ち、晩年まで著述を行っていたのでその全貌はまだ明らかにはなっていないだろう。歌人としてばかりでなく、日本・中国の古典にも多くの著作を持つ。日本の古典では、京極為兼と田安宗武がその研究の中心になっている。京極為兼を中心とした京極派の研究は今日大きく進展しているが、田安宗武の研究は必ずしも活発とはいえない。中国の古典では、戦前の『高青邱』(日本評論社、1942年)や訳詩集『鶯の卵』(春秋社、1956年)、また杜甫関連の九冊がある。善磨の中国古典研究もその全体を通して評価されているとはいえない¹⁾。著作からも分かるように杜甫の訳注が研究の柱となっているが、1000年にも及ぶ杜甫の研究史の中で位置づけていくには、多くの準備が必要なので、まずは土岐善磨自身の3度の中国訪問という中国との、直接の接点を通して善磨と中国古典との関わりを考えてみたい。本稿では、最初の中国訪問を考察する。善磨の中国訪問は、1960年4月(75歳、中国文字改革視察学術団団長として)、1964年10月(79歳、日中文化交流協会団長として)、1973年3月(88歳、日本文化界代表団団長として)と、70代に入ってから実現している。このうち2回目までは、国交正常化前の訪問であるので、その実現にはいろいろな経緯が

あったものと思われる。最初の訪問時、日本側で交渉を担当したのは、日中文化交流協会である。中国側の窓口になったのは、中国人民対外文化協会(政府の支援を受けた民間外交を促進するための団体)であった。

中国文字改革視察学術団がなぜ組織されたのかそれを直接明らかにする資料はまだ突止めることができていないが、その経緯は状況からおおよそ推測できる。まず同行者だが、有光次郎・倉石武四郎・実藤恵秀・高杉一郎・原富男・松下秀男・宮沢俊義・村尾力・村岡久平の9人である。この中で中国の文字改革について、専門的な著作や論文を中国訪問の前に書いていたのは、倉石武四郎・実藤恵秀(さねとうけいしゅう)・村尾力の3人だけである²⁾。また、中国学者は、この3人に加えて原富男(中国思想史・第1期～5期国語審議会委員・中国の地名・人名の書き方に関する主査委員会主査委員長)だけである。非専門家が多いうに見えるが、一行のなかに、エスペラントの高杉一郎(本名小川五郎、日本エスペラント学会評議員)とローマ字運動家の松下秀男(日本のローマ字社事務局長)が加わっていることは注目される。団長でローマ字論者でもある土岐善磨は、中国の文字改革について、現地での体験を通して次のように書いている。「ほくと倉石

教授とは、文字改革の関係者から求められるままに、日本におけるローマ字とローマ字教育、国語審議会の活動状況、および日本における漢語の教学状況という三頂につき、持参した若干の資料を提出して概要を述べる「講話」の機会をあたえられ、中国の文字改革と日本の国語政策とのあいだには、当然に共通点と、特殊な相違点とのあることを、短い時間ながら、あきらかにしたつもりである。」「中国文字改革の方向」『杜甫草堂記』（春秋社、1962年8月、321頁）。この一文から1960年の視察が国語審議会の動向と密接に関わっていることが推測できる。土岐善麿は、官制から法律・制令に基づく組織に改まってからの国語審議会の第1期から第5期（1949～1961年）までの長期にわたって会長を務めている。この期間審議会では、「ローマ字のつづり方」や「送りがなのつけ方」など重要な国語政策が答申されている。一行の中に法学者の宮沢俊義がいるが、宮沢は第1・2期の国語審議会の副会長という経歴を持っている。戦後の国語審議会には、日本語運用の実態に即してローマ字化やカナモジ化など表音化を進め、漢字使用にも制限を加えていこうという改革派（表音派とも呼ばれた）とそれを疑問視する慎重派との対立があり、それが決定的になったのが第5期（1959・3～1961・3）の時である。戦後の国語審議会は発足の当初、互選で委員が選ばれていたため、人事に偏りが生じ（改革派の方が多かった）、両派の意見がかみ合わないまま対立が決定的となり、第5期目に船橋聖一ら五人の委員の脱退という、当時かなりの波紋を呼んだ社会問題にまで発展したのである（戦後の国語審議会の歩みと国語政策の動向については、野村敏夫『国語政策の戦後史』（大修館書店、2006年11月）や安田敏朗『国語審議会一混迷の60年』（講談社、2007年11月）を参照）。新中国での「普通話」の推進と連動した言語運用の簡易化を目指す一連の言語政策が実績を上げてきた時期と重なっているので³⁾、中国での成果を踏まえながら国語審議会での論議に一定の方向を打ち出したいという考えもあって実現した視察と考えてよいだろう。中国側の受け入れについては後述する。

ここで、同行者について簡単に触れておく。

中国の文字改革についての専書を持つ倉石武四郎（第1期から第5期まで国語審議会委員、5期目は副会長を務めている）は、親字を基準とするのではなく、拼音のローマ字綴り順に語を配列した（つまり発音を重視した）世界初の試みである『岩波中国語辞典』を編集している。日中文化交流史で大きな成果を上げた実藤恵秀も「さねとうけいしゅう」とひらがな書きで署名しているように表音派である（土岐善麿と同じ早稲田大学教授、第4期国語審議会委員を務めている）。中国の文字改革問題に一番精通した二人の専門家がともに土岐会長に近い立場だったことは間違いない。前述のようにエスペランティストやローマ字運動家が学術団に参加していることも、この視察が当時国語審議会の主流であった改革派の動向と密接に関わっていたことを裏付ける。このような背景のもとに実現した中国訪問であるが、帰国後に、倉石武四郎「中国の文字改革」学術代表団報告書⁴⁾・「現地でみた文字改革」⁵⁾・「中国の文字改革について」⁶⁾、さねとうけいしゅう「中国のもじかいかくをみて」⁷⁾・「ほんとうに、どうすすめているか」⁸⁾、原富男「中国の言語政策の動向」⁹⁾などの文章が書かれていてそれぞれの内容については委細を略すが、中国の文字改革の現状の報告とともに、それが国語審議会での国語政策とも関わっているという認識が各自に持たれていたことを読み取ることができる（例えば、当用漢字1850字をめぐる中国文字改革委員会から質疑があり日本側がそれに答えている）。

土岐善麿自身の中国の文字改革についての理解は、「漢字が減びなければ、中国はかならず滅びる」といった魯迅の悲壮な提言は有名であるが、それは現在のところ、そのままただちに文字改革の「標語」としては用いられず、漢字を捨てるか、ローマ字を採るか、いわゆる二者択一というわけではなく、簡略化によって旧来の漢字の使用を簡便化し、容易にするとともに、ローマ字化による表音化が、漢字の学修をいっそう効果的にする一方、共通語の普及を待って、将来、人民大衆の能力と判断が決定してゆくものと観察される。「二本の足で歩く」、このことばは、「二条腿走（正しくは两条腿走路）」という中国的表現を日本

語ふうに伝えたもので、われわれの滞在中も、各地各方面の事業についていくたびか聞かされたが、文字改革の方針も、こうした慎重な態度のとられていることが、われわれにも実感としてわかった」（前掲「中国文字改革の方向」（318頁））とある通りで、本質に踏み込んだものであったことが分かる。

中国文字改革視察学術団の中国訪問の背景を考えてみたが、中国側はどのように日本からの学術団を迎えたのだろうか。中国社会科学院のサイトで過去の新華社電が検索できるが、日本の学術団に関して、

「新华社六日讯 全国人民代表大会常务委员会委员、中国文字改革委员会主任吴玉章，今天上午接见了日本考察中国文字改革学术代表团团长土岐善麿和全体团员，并进行了亲切的谈话。接见时在座的有中国文字改革委员会副主任胡愈之、韦愨、丁西林。」

「新华社一〇日讯 中国文学艺术界联合会今晚举行酒会，欢迎由土岐善麿率领的日本考察中国文字改革学术代表团。戏剧家欧阳予倩在酒会上致词欢迎日本考察中国文字改革学术代表团来我国访问。代表团团长土岐善麿在酒会上讲了话。他对中国文艺界对于日本人民和日本文艺界在反对日美“安全条约”的斗争中所给予的真诚支持和同情，表示了热情的感谢。他严厉地谴责了岸信介敌视中国的政策。他说，加深同中国的友好关系、早日实现恢复日中两国邦交，保卫亚洲和世界和平，是日本文化工作者的首要的崇高事业。参加今晚酒会的有中国文化界人士胡愈之、韦愨、田汉、梅兰芳、赵朴初、老舍、许广平、吕驥、谢冰心、叶圣陶、萧三、周而复等五十多人。」

「新华社一一日讯 中国人民对外文化协会会长楚图南今天接见了以日本著名语言学家土岐善麿为首的日本考察中国文字改革学术代表团全体团员，并进行了亲切的谈话。接见时，在座的有中国人民对外文化协会秘书长周而复，副秘书长林林、孙平化、北京图书馆副馆长左恭等。接见后，中国人民对外文化协会举行电影晚会，招待代表团全体团员。」

「新华社三日讯 东京消息：日本考察中国文字改革学术代表团一行十人在三日乘飞机回到东京。

代表团团长土岐善麿在候机室举行的记者招待会上说，只有废除了日美“安全条约”，日本才能获得独立。同时，废除“安全条约”同恢复日中邦交和日中文化交流有着不可分割的关系。土岐说，通过这次对中国的访问，他知道了中国人民是衷心渴望同日本人民友好相处的。他并且说，中国绝不会侵略日本。土岐指出，日中两国间的邦交还没有恢复，根源在于岸信介政府所执行的政策。土岐还报告了考察中国文字改革的情况，并且说，这次考察对于日本文字的改革有很多好处。」（中国社会科学网 <http://www.cssn.cn/>）

などの報道があったことが分かる。学術団を迎えた中国側の顔ぶれを見るとそれぞれの分野での重要人物が対応していることが分かり、中国側が慎重な準備をして一行を迎え入れたことが分かる。

帰国間際の土岐団長と記者との応答の報道からも分かるように、60年安保条約の締結で日本の国論が大きく揺れていたなかで条約締結に反対し日中の国交を望む立場として学術団が中国側に迎えられたことが分かる（当時、日本政府は中国敵視政策を取っていた）。報道のなかで、中国の文字改革の視察が、日本の国字問題にも有益であることも伝えている。文字改革委員会の資料を中心に編集された《建国以来文字改革工作编年记事》³⁾の1960年4月2日条に日本の学術団の中国訪問に触れて、「在国語審議会会长土岐善麿率领下，来我国访问。」（125頁）と土岐の身分を記している。学術団が国語審議会の動向と密接に関連していたことは、このような資料からも分かるだろう。当時は民間で日中間の交流を模索をしていた時期なので、国語審議会という公的な活動をしていた土岐善麿や倉石武四郎らを迎えることで中国側は日本での何かしらの反応を期待していたのだろう。

3月28日から5月3日までの35日間に及ぶ学術団の中国滞在中の足どりは、日中文化交流協会事務局長村岡久平の書いた報告書「訪中三五日間の経過」（『中国語』第31号，1962年4月）を基本資料に、前掲の諸氏の報告書類もつき合わせることでかなり詳細にたどることができるが、ここでは土岐善麿の文章を中心にみていくことにする。国交正常化前なので、一行は香港から深圳を

經由して汽車で北京に向かっている。

4月10日に開かれた中国文学芸術界聯合会主催の学術団の歓迎会の列席者については、新華社の報道と、『杜甫草堂記』（37頁）に記すところが重なる。各種の資料からまとめると、土岐善麿をはじめ一行が滞在中に会見した主な人物は、言語や文字の専門家として、丁西林（中国文字改革委員会副主任）、傅懋勳（言語学者）・高名凱（言語学者）・胡愈之（中国文字改革委員会副主任）・季羨林（中国文字改革委員会委員・言語学者）・黎錦熙（中国文字改革委員会委員・言語学者）・陆志韦（言語学者・心理学者）・吕叔湘（語言研究所副主任・言語学者）・倪海曙（中国文字改革委員）・王力（中国文字改革委員会委員・言語学者）・韦憲（中国文字改革委員会副主任）・魏建功（中国文字改革委員会委員・言語学者）・吴玉章（中国文字改革委員会主任、文字改革の実質的な責任者である吴玉章の文章は『文字改革文集』（中国人民大学出版社、1978年12月）にまとめられている）・叶籁士（中国文字改革委員会委員）らがいる。文化界では、馮至・郭沫若・蔣兆和・老舍（1965年初来日した老舍から贈られた揮毫の写真が、『新訳 杜甫』（光風社書店、1970年3月、161頁）に載せられている）・林林（詩人）・吕驥（音楽家）・马少波（劇作家）・梅兰芳・欧阳予倩・田汉・萧三・冰心・叶圣陶らである。

土岐善麿の最初の中国訪問について、自身が記したものは、主に二種類ある。一つは歌集の『四月抄』（東峰出版、1963年2月）と前出の随筆『杜甫草堂記』である。『杜甫草堂記』「はしがき」には、「一昨年の春は、はからずも大陸に渡るを得て、四川省の成都まで赴き、浣花溪のほとりに杜甫草堂を訪うことができた。帰ってから、『新訳 杜甫詩選』第四冊の編集を進めるあいだも、わたくしはたえず楽しかった旅の印象と記憶を追った」（1頁）と記されていて、善麿の旅行時の思いが伝わる紀行文とともに杜甫をめぐるの考証も取りあわせた内容になっている。歌集の『四月抄』は、四部から構成されていて、最初の「大陸小情」に旅行詠全95首が集められている。『四月抄』は、『杜甫草堂記』と補完し合う内容になっ

ており、また歌として表現されている分、文章では伝えにくい善麿の思いが伝わってくる。次の二首などもどのような思いで善麿が中国に旅立ったのかその心情がよく伝わる。

大陸にしかばねのやま血の河となしはてて
何を 遂げんとせしや
友情の手はあたたかし さしのべて多くをいわず
すでにうなづく

旅行詠の中には、忘れ難い人々との出会いも詠まれている。

会談

杜甫のため酒会の席に乾杯す 蔣兆和画伯と
馮至教授と
その像をかきし画伯の表情が酔眼の前に 杜甫がごとくみゆ

『杜甫伝』も『杜甫選集』もすでに読みたりと 語れば われの訳書もみしという
特装本に署名してみずからわたされつ 若竹さやぐ北京大学の庭
偉大なる民族の過去 いま世界の 新しきものとして語るべしと

酒会は、前述の歓迎会のことを言っている。『杜甫伝』と『杜甫選集』は、馮至北京大学教授の著作である。北京で特に会いたい人物はと中国側から聞かれたとき、土岐善麿は「蔣兆和画伯と馮至教授」の二人を挙げている。

蔣兆和（1904～1986）は、民衆の苦しみと平和を願った「流民図」（1943年）などで知られる画家である。歴史上の人物も多く手がかけていて、なかでも杜甫を描いたものは有名である。1959年に描かれた「杜甫像」は、杜甫の研究書にしばしば引かれていて、近刊の吴中胜《杜甫批評史研究》（中国社会科学出版社、2012年4月）もこの「杜甫像」が表紙を飾っている。この蔣兆和について、土岐善麿は「蔣氏は齊白石翁生存中から、すでに中国画壇一方の重鎮として知られている。その杜甫像にほくは、傅庚生著『杜甫詩論』の中で接し、この推重すべき一幅のごとき

を、もし書齋の壁間にかかげることができたら、と思っていたのである」『杜甫草堂記』（184頁）と記している。『杜甫詩選第四』（春秋社、1961年11月）の口絵に蔣兆和の「杜甫像」を掲げているように、「もっとも生活的にいきいきとした現代における代表作」と善麿は高く評価していたのである。

馮至教授との初対面については、『新訳 杜甫』（光風社書店、1970年3月）の「そえがき」（400頁）に次のように記している。

すぐれた杜甫伝の著者として知られる馮至氏は、詩聖における最終的苦難の生活状況を小説ふうのものにまとめ、「白髪間生黒一絲」と題し、一九六二年「人民文学」の四月号に発表されたが、それは杜甫生誕一千二百五十年を記念する詩人教授の創作とみられ、その二月には、詩聖の悲劇的一生における「一種樂觀主義精神」についても、短い論稿を「人民日報」に寄せられた。いまそれらを読みかえし、そぞろに一九六〇年春四月、北京大学で初対面のとき、静かに構内を案内されたのち、別れぎわに、『杜甫詩選』の特製版に署名したのを「俗書ですが……」と、学者らしくいって贈られたことも忘れ難い（『詩選』で、馮至は「前言」と264首の編選を担当している）。

上掲の歌と合わせて、土岐善麿が馮至に直接会って一層の好感を持ったであろうことは明らかである。馮至（本名馮承植、1905年～1993年）は、ハイデルベルク大学でノヴァーリスの論文で学位を取得したドイツ文学者で、民国期の新詩の代表的作者でもある。その作品は日本でもすでに紹介されている（秋吉久紀夫訳『馮至詩集』（現代中国の詩人）土曜美術社、1989年11月、馮至自身から序が寄せられている）。善麿の歌にも詠まれているように、馮至には杜甫の専著もあり、杜甫の研究者としても知られている。善麿も『新訳杜甫詩選』や『新訳 杜甫』のなかで、その説を数カ所に渡って引いている。文中に引く「人民日報」掲載の「一種樂觀主義精神」についての論

稿とは、『人間在好詩』と題するもので、現在では吳乾定編《馮至全集 第六卷 杜甫傳 詩与遺產》（河北教育出版社、1999年12月、155頁）に収められていて容易に読むことができる。その結論の部分を引くと次のようになる。

杜甫在旧日的封建时代度过了他的悲剧的一生。无论在什么样的艰苦的情况下他都不曾被社会上的恶势力和自己的贫病所压到，他也不曾采取任何一个方式逃避现实，这是由于他具有深刻的乐观精神。这种乐观精神是从他经历的国家灾难，人民的疾苦和个人的悲剧里锻炼出来的，痛苦越深，爱国爱民的感情就更为深切，写诗也更为努力。正是这个原故，他才创作了许多传诵千古的好诗，影响无数后代的诗人，赢得广大人民的敬爱。

国家の災難や民衆の困苦、また自身の悲劇を体験するなかで鍛えられ、その痛苦が深まる程に国家や民衆への深い感情は一層痛切になり、その力が杜甫を詩に向かわせたと馮至は指摘している。悲惨な現状に立ち向かい、それを受け入れ自身を前向きに向上させていく杜甫の強い精神力を「樂觀精神」と形容したものである。

「白髪間生黒一絲」は、杜甫を主人公とした歴史小説で、張恬編《馮至全集 第三卷 伍子胥 山水》（河北教育出版社、1999年12月、454頁）に収められている。

この作品は、「蘇大侍禦渙，靜者也，旅寓江側，不交州府之客，人事都絕久矣。肩輿江浦，忽訪老夫舟楫，已而茶酒內，余請誦近詩，肯吟數首，才力素壯，詞句動人。湧思雷出，書篋幾杖之外殷殷留金石聲，賦八韻記異，亦見老夫傾倒于蘇至矣。」という小序を持つ「蘇大侍御訪江浦賦八韻記異」と題する杜甫の詩（杜甫の亡くなる一年前の大曆四年（769年、杜甫58歳）の作、詩中に「白間生黒絲」の語がある、仇兆鰲撰『杜詩詳注』（中華書局、1979年、2014頁）を参照）と、蘇渙作として『全唐詩』卷二五五に三首伝わる変律のうち「毒蜂成一窠。高挂惡木枝。行人百步外。目斷魂亦飛。長安大道邊。挾彈誰兒。右手持金丸。引滿無所疑。一中紛下来。勢若風雨隨。

身如萬箭攢。宛轉迷所之。徒有疾惡心。奈何不知幾」「一女不得織，萬夫受其寒。一夫不得意，四海行路難。」の二首を中心に書かれた歴史小説である（馮至は最初の変律の終わりの句を「機」とするが、「幾」と同じで「深深事物的变化的形象，征兆」の意味である（赫世峰主编《增订注释全唐诗》文化艺术出版社，2001年5月）参照）。杜甫と蘇渙の詩に感心したことは、宋代の計有功撰『唐詩紀事』や洪邁撰『容齋隨筆』などにも記されている¹⁰⁾。杜甫の詩序にあるように、蘇渙の方から自作を杜甫に示したのは確かだが、それがこの二首であったかは分からないことは馮至自身も『杜甫伝』に記している。蘇渙との出会いが、

一天，有一个名叫苏涣的来拜访他，在茶酒间把他近来写的诗在杜甫面前诵读，杜甫听了，觉得句句动人，小小的船篷里充溢着金石的声音。……这些诗的力量有这样大，使杜甫觉得好像白发里生出黑发，船帘外仿佛听到湘娥在水上悲啼。（前引《馮至全集 第六卷 杜甫传诗与遗产》，149頁）

と、最晩年の杜甫にとり大きな体験であったことを、馮至はこの評伝で指摘しているのだが、研究では踏み込めなかった二人の詩を通じた交流を、現存する蘇渙の詩を活かして具体的に描き出したのが「白髮間生黑一絲」という作品である。蘇渙の示す詩に刺激されて、杜甫の創作欲が高まり、精神が若返っていく。民衆が困苦に喘ぎ自身も多病と貧困の内になりながら、現実を前向きに受け止めていく杜甫を共感を持って描いたのがこの作品である。馮至の描く杜甫の「樂觀主義精神」に土岐善麿がどのような共鳴を覚えたのかおおよそのところ確認できたかと思う。

馮至が土岐善麿にどのような印象を持ったかは分からないが、馮至の全集を閲すると、佐藤普美子教授¹¹⁾に宛てた1984年7月10日付けの書信中に、「您4月12日的信和复印的两份年谱，我早就受到了，没有复信，劳您惦念，除了深感歉疚和请您原谅外，我说不别的话来。/吉川和土岐两位先生由于他们是杜甫的研究者和爱好者，他们几次来华，我和他们都做过有意义的会见和谈话。不

料他们二位在1980年春先后逝世，我当时在北京听到这个消息，甚为哀悼。我想将来写回忆录时，要写他们，以表示我对他们的敬意。您寄给我的资料对我很有帮助，我非常感谢。」（馮姚平编《馮至全集 第十二卷 书信 自传 年谱》河北教育出版社，1991年12月，255頁）とある。吉川幸次郎と土岐善麿の年譜のコピーを佐藤教授が送って来てくれたことへのお礼の一節である。全集掲載の「馮至年譜」を参照すると、死後に刊行された《文坛边缘随笔》（上海书店，1995年8月）に収められた自伝的な内容を含む文章をこの書簡の後、馮至は何篇か書いているが、吉川幸次郎と土岐善麿についての回想の文章は書かれていない。この二人に「敬意」を持ったというのでもし書かれていたら興味深い内容になっていただろう。

北京で出会った人々のなかで、馮至の他、土岐善麿がその交流を細やかに記しているのは、欧陽予倩である。欧陽予倩は、日本への留学経験を持ち、日本とも交流が深いが、なかでも谷崎潤一郎（「上海交友記」1926年・「欧陽予倩の長詩」1957年）との歳月を超えた親交はよく知られている。善麿が揮毫を求めると、欧陽予倩は三首の詩を認めて渡している。善麿はさらに毛筆で書いてもらいたいと願って、欧陽予倩もそれにも応じている。その三首のうちの一つ、

艸堂新構對芳春 杜老當年歷苦辛 借問而今誰繼武 工農億萬盡詩人

の詩に対して、土岐善麿は「新中国では杜甫を「人民詩人」として、その研究がなかなか盛んである。そしていま、その人民の億万が労働者であると同時に、世界平和のため、民族共存のために、詩人的な希望の夢の上に追求し推薦しつつあるという意と解される」『杜甫草堂記』（35頁）と記していて、新中国の未来への期待とも重ねてこの詩を理解していたものと思われる。

北京での調査や会談を終えた後、学術団は、成都、武漢、上海・蘇州・西湖など各地を観光して帰国している。成都では、善麿にとってかねてからの念願であった杜甫草堂や武侯廟など歴史遺跡を見学している。

杜甫草堂では、帰り際、記念に門票まで、係の女性からもらっている。土岐善麿は、門票につ

いて、「またいつ来られるのか、もう来られる機会はないのかと思えば、このザラ紙の小さな一片も、ぼくにとっては旅情をそそる記念である」（『杜甫草堂記』70頁）と感想を記していて、「毎票一人 票价三分」と印刷されたザラ紙の門票の図まで載せている。善麿の静かな感動が草堂訪問の文章からは読みとることができる（門票から、簡体字の普及が実感できる）。成都でゆかりの遺跡を案内したのは、楊明照四川大学教授である。

楊教授は『文心雕龍』の専門家である。楊教授の著した《文心雕龍校注拾遺》（上海古籍出版社、1982年12月）は、「《文心雕龍校注拾遺》是研究《文心雕龍》之版本、校勘、理論淵源以及作者身世一部重要的专著，有极高的参考价值，该书资料丰富，引述完备，所下论断多属有据之论。」（周振甫主編《文心雕龍辭典》中華書局、1996年8月、486頁）と、研究史上の重要著作とされ、現在でも再刊されている。

土岐善麿は、成都の古書店で偶然見つけた『杜詩錢註』とともに『文心雕龍』を求めている。善麿の求めた『文心雕龍』は、黄叔琳注、紀昀評の粵東雙門底芸香堂承刊本を成都で覆刻したものであった。善麿が楊教授にこの本を入手したことを話すと、「先生は半白のあごひげをふるわせつつ、「奇遇奇遇」と喜ばれた」（『杜甫草堂記』67頁）という。そこで、善麿は記念の本に識語を認めることを楊教授にお願いしている。『四月抄』（35頁）にもその経緯が次のように詠まれている。

古書店にたなのほこりを払いつつ はじめて
ひとり旅情を感ず
老教授わが買いし古書をよろこびて 識語も
快く書くべしという

翌日の朝5時半の早い出発にもかかわらず、楊教授は約束どおり識語を認めたその古書を善麿に手渡し、一行を見送っている。識語には、

東歸後定能以研治杜詩之餘從事抉發俾舍人
（＝撰者の劉勰を指す）書更得大光芒於友邦也

と、杜甫研究のかたわら劉勰の隠れた名著の価

値を善麿が日本で大きく輝かせるだろうと記されていた。土岐善麿が四川で入手した『文心雕龍』は、現在早稲田大学の「古典籍総合データベース」中の土岐文庫に電子化されて一般公開されている。その第四巻の巻末に、楊教授の謹直な手跡を確認することができる（http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunkol17/bunkol17_w0052/index.html）。

四川の後の各地の訪問について『杜甫草堂記』には、旅の思い出に西湖で柳絮楊花の花びらを拾い集めたことを記すほか特に記述はないが、帰国のまぎわの広州滞在中に石湾で作られた陶製の杜甫像を贈られたことが大きな感激とともに記されている。『四月抄』には、上海での魯迅記念館を訪れた際と思いがけない出会いのあった古書店での詠が収められている。

漢字が減びなければ中国は必ず減びると 説
きし魯迅の眼の前に立つ
歴史の中に遂に阿Qを死なしめて なおし
も生けるものを過去に追う
ゆくりなく旧知にあえるよろこびよ 上海に
来て得たる『杜詩説』
三十年十二巻の稿成りしとき 半銭も著者の
手にはなかりし（黄生）

最初の詠は、中国文字改革視察学術団団長として親しく文字改革の現状を見た後、中国でのこれからの漢字の運命を思いやった感慨であろう。

『杜詩説』は、清初の人である黄生の三十年に及ぶ杜甫研究が結実した考証の書で、「黄生主张解诗应“以意逆志”，注杜者应深悉其生平，综贯其全集，融会一诗之大旨，而后评其一字一句，方能不失其真精神，故其考证论评颇多精妙之说。因其深通小学，于字词之解，尤多灼见。…黄氏说杜影响甚大，仇兆鳌《杜诗详注》引黄说多至三百餘条。」（张忠纲等编著《杜集叙录》齐鲁书社、2008年10月、281～282頁）と、評価されているように、清朝の杜詩学に大きな影響を与えた書である（『詳注』に引く黄生の説について、善麿自身も『杜甫への道』（光風社書店、1973年7月、481頁）の中で触れている）。この書に巡り会え

たことの静かな喜びが善麿の歌から伝わってくる。上海で購入したこの古書も現在、前述の早稲田大学の土岐文庫に電子化されおり、善麿の手になると思われる朱書きの圈点などを確認することができる。

土岐善麿の最初の中国訪問が、文字改革も含めて、新しい中国の歩みを親しく知ることになったことと合わせて、長年親しんできた中国古典との旧情を充たす充実した体験であったという意味でも大きな成果があったといえる。最後に帰国後まもなく刊行された『新訳杜甫詩選第四』の「はしがき」の一節を引いて、善麿の充たされた思いを確認しておきたい。

思えば、大正末期以来ながいあいだ中国の古典詩に親しんできた。もとより一読者としての境涯においてであり、その一部を日本語に訳してみる作業については、第二冊のおわりにしるしたとおり、いわばじぶんの国語能力をいささかでも進めるためのメモであるに過ぎないのである。今時はしなくも現地の風物に接し、その巡礼の一記念として、この一冊を刊行するとともに、今後いっそう一種の実感をもって中国を観ることのできることは、わたくしの晩年のよろこびとするところで、ひそかに感謝の念を禁じ難い。(3頁)

- 4) 『中国語』（第32号～39号, 1962年5月～1962年12月）
- 5) 『アジア経済旬報』（第439号, 1960年8月）
- 6) 『文学』（第28巻第11号, 1960年11月）
- 7) 『中国語学』（第101号, 1960年7月）、本文で分かち書きのひらがな表記を試みている。
- 8) 『増補 中国の文字改革』（くろしお出版, 1871年9月）
- 9) 『國文學 解釈と教材の研究』（1961年9月）、「漢字・かな問題と教育」と題する国字・国語問題の特集中の一篇として書かれている。
- 10) 杜甫と蘇渙の交流については、陈貽焮《杜甫評傳（第二版）》（北京大学出版社, 2011年1月, 994～1000頁）も参照。
- 11) 佐藤教授は、馮至研究を集大成した『彼此往來の詩学—馮至と中国現代詩学』（汲古書院, 2011年2月）を著している。

注

- 1) 大野実之助「土岐善麿と中国文学」『短歌』（第27巻第6号, 1980年6月）などの短い文章があるだけである。
- 2) 倉石『漢字からローマ字へ—中国の文字改革と日本』（弘文堂, 1958年）、さねとう『中国の文字改革』（くろしお出版, 1958年）など。
- 3) 1956年に「漢字簡化方案」、1958年に「汉语拼音方案」が公布されている。《文字改革》雑誌編集部編《建国以来文字改革工作編年記事》（文字改革出版社, 1985年10月）などを参照。